

「抗がん剤が効がなくなったら延命治療は終わりでいい」

医師で僧侶で末期がんの私が語る 少し延びたいのちのちの使い方



僧侶、そして医師として
数々の末期がん患者を看取
ってきた田中雅博氏。自身
も末期がんになり、余命を
静かに受け入れながら、最
期の日々をどう過ごすかを
思索している。

【特別インタビュー】

と綴る「死が社より
「死が社より」が社より
「死が社より」が社より

田中雅博
「死が社より」が社より
「死が社より」が社より

いのちの
苦しみが
消える



前回、週刊ポストの取材
を受けてから3か月以上も
経って、いま生きているの
が不思議です。抗がん剤治
療が効いたんですね。宝く
じに当たったような気分だ
す。

まは少しいのちが延びた状
態なので、どうやって日々
を過ごすかを考えています。
田中雅博氏(70)は、
栃木県益子町の西明寺に
生まれた。西明寺の住職
として、そして併設され
た普門院診療所の内科医
として、数々の末期がん
患者と向き合ってきた。

再増悪するまで抗がん剤
治療を続けますが、それで
延命治療は終わりです。い
人は残されたいのちがあ
とわずかだということが分
かると、死ぬのが怖いとい
う「いのちの苦しみ」がや
ってきます。それは、医学
では救うことはできません
なぜ「いのちの苦しみ」

が生まれるかという、「自
分に対するこだわりがある
からだ」とお釈迦様は言っ
ています。

「自分への執着」を捨てる
のが仏教の生き方ですが、
「いのちの苦しみ」の緩和
は仏教だけではありません
自分の人生がどんなもので
あったとしても、そこに価
値を見出して「自分の人生
の物語」を完成させる。そ
して、そこにいのちより大
切なものを見つけることが
できれば、「いのちの苦し
み」は緩和できるのです。

そのために、医療現場に
はスピリチュアル・ケアワ
ーカーが必要です。スピリ
チュアル・ケアワーカーと
は、患者さんや医療従事者
の「いのちの苦」のケアを
する専門職です。患者さん
の話を傾聴して、本人の人

生、価値観を尊重します。
そしてその人が「人生の物
語」を完成させるのをお手
伝いする。

3月に2泊3日で、京都
で行なわれた日本臨床宗教
師会(日本のスピリチュアル
・ケアワーカーの会)の発会式
に行ってきたんですよ。私
も少しいのちが延びました
ので、臨床宗教師の実習の
手伝いをする事になった
んです。

それから、進行がんの患
者さんやご家族が集まって
話す場を月に1回、西明寺
で設けることにしました。
私は聞き役です。ほとんど
の進行がんの患者さんは日
本の病院では話を聞いてく
れる人がいないので、みな
さん、そういう人を探して
いるんです。
いまは以前に比べると考

えられないくらい暇で、好
きなことをしているような
状態です。妻には「もっと
働け」と言われるほどです
(笑)。医学と宗教の両方
に関して話せる人は私以外
に少ないので、生きていら
れる限りは、スピリチュア
ル・ケアを広める活動をし
ていこうと思っています。

A m a z o n の「お坊さ
ん便」(※)が話題になっ
ていますが、これでスピリ
チュアル・ケアワーカーを
派遣したらいと思うんで
すよね(笑)。

幸いなことに、いまは
色々なメディアが取材に來
てくれて、私の話を聞いて
もらっているわけですから、
こんな嬉しいことはないで
すよ。私にとっては最高の
スピリチュアル・ケアにな
っています。

普門院診療所内科医・西明寺住職 田中雅博

※インターネット通販大手・Amazonで、葬式や法事の際の僧侶の手配が全国どこでもできるシステム。代金はクレジット払いが可能。